

トマス・アキナスの個体化理論：その統一的理解のために

著者	石田 隆太
発行年	2018
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2017
報告番号	12102乙第2854号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00152921

氏 名	石田隆太
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博 乙 第 2854 号
学位授与年月日	平成 30年 3月 23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	トマス・アキナスの個体化理論——その統一的理解のために——

主 査	筑波大学 教 授	博士（文学）	檜垣 良成
副 査	筑波大学 教 授	博士（文学）	桑原 直巳
副 査	筑波大学 教 授	博士（学術）	秋山 学
副 査	慶應義塾大学教授		上枝 美典

論 文 の 要 旨

本論文の目的は、トマス・アキナスが個体化という概念を適用している様々な種類の事物、具体的には、通常の複合された実体に加えて、天使、神、人間のそれぞれにおいて個体化の原理がどのように見出されるかを検証することによって、トマスにおける個体化理論の統一的な理解を得ることにある。その際、トマスの原文に極力即しながら、個体化の原理という概念そのものに関する本質的な規定をトマスの解釈として提示することが試みられており、様々な事物の個性がどのような共通の基盤の上で多様とされているのかが理解される。

第1部「トマス・アキナスによる個体化理論の枠組み」の第1章「質料的な事物における個体化の原理の二面性」では、質料的な事物に即して、第一に、質料が個体化の原因であり、共通化不可能性の理拠が個体化の理拠であるとトマスが述べている箇所から、個体化の原理における二面性の存在が指摘される。第二に、質料的な事物において個体化の理拠を担うものとして次元ないし次元量という附帯性が想定されていることが確認される。第三に、個体化の原理における二面性と次元ないし次元量の担う特殊な役割がともに聖体変化に関する議論でも確認できることが示される。質料的な事物においては、質料と次元および次元量が、個体化の原理における二つの側面を担っている。

第2章「天使における個体化の原理」では、天使に対して「あることは別の、自身によって自存する形相」を個体化の原理として措定する作業の中で、被造物全般に関する個体化の原理という概念には、或る形相の非受容性の根拠という側面とそれの基体という側面の二つがあるという解釈が提示される。第一に、自存することの原理と担い手が区別されることの原理という二つの側面が、天使を含む被造物全般における個体化の原理の二面性であることが指摘され、第二に、非質料的な事物である天使に関しては、個体化の原理は形相の側にあることが確認され、第三に、トマスが、個体化の原理であることを形相の非受容性に求めていることに基

いて、非受容性の根拠および基体という二つの側面が、これまでに取りあげてきた個体化の原理の二面性と重ね合わせられる。

第3章「神における個体化の原理」では、神に対して「自存するあることそのもの」を個体化の原理として措定することにより、被造物の創造者である神に対しても、非受容性の根拠および基体という道具立てが適用可能であることが示される。第一に、非質料的な事物である神に関しても、天使と同様に個体化の原理が形相の側にあることが確認され、第二に、神の個体化に関する議論が歴史的にも存在し、そこでは個体化ということが既に同時に個性の意味に極めて近くなっていることが指摘され、最後に、神に関する固有な個体化の原理が定式化される。

第4章「人間における個体化の原理」では、質料的な事物の中では唯一その魂が自存しうる人間に関して、形相である魂が非受容性の根拠であるのに対して、質料である身体は非受容性の基体であるという解釈が提示される。第一に、人間の魂の個体化に関しては、質料である身体のみならず形相である魂にも個体化の原理としての役割が求められていることが確認され、第二に、人間の魂に非受容性の根拠としての側面が見出せることが示される。そして最後に、魂の個体化の全体原因および全原因という概念に着目することで、人間に関する固有な個体化の原理が探求される。

第2部「トマス・アクィナスの個体化理論が持つ諸相」の第1章「附帯性の集合を個体化の原理として採用しない理由」では、個体化の原理に関するポルピュリオスの説に対するトマスの評価を通して、質料的な事物に対する個体化の原理として必要な要件が、附帯性の集合では満たされない理由が明らかにされる。第一に、質料的な事物に関して、質料や次元および次元量は存在論的な個体化の原理であるのに対して、附帯性の集合だけでは個体を識別する原理にしかなりえないことが確認され、第二に、アリストテレスの『形而上学』においてアイデアの定義不可能性が論じられている箇所に対する註解で、トマスが個体化の原理に関するポルピュリオスの説をアイデア論者の側に位置づけていることが指摘される。

続く第2章「可知的質料と個体化の原理」では、可知的質料が数学的な対象においては個体化の原理として考慮できる可能性を指摘することで、トマスの個体化理論が数学的な対象をも視野に入れた上で構築されていることが示される。第一に、トマスのテキストで可知的質料という概念が使われる文脈が概観され、第二に、可知的質料はたしかに数学的な対象に見出されるものではあるが、それは量の基体としてのみの側面を抽象したものにはすぎないので、あらゆる質料的な事物に対して潜在的に認められることが指摘される。最後に、トマスが質料的な事物に関する個体化の原理を探求する際に次元および次元量に着目していることから、量に特化した基体である可知的質料のことをも念頭に置いていたという仮説が提示され、数学的な考察が、次元および次元量が個体化の原理であることの議論を支えるものである可能性が示される。

最後の第3章「『超越的なもの』と『個』：トマス・アクィナスの場合」では、個という概念を超越概念として捉えるというアーツェンの仮説を批判的に検証することを通じて、様々な事物に対して個という概念が使用されていることをトマスの形而上学的な思想において理論的に位置づける作業が行われる。第一に、超越概念の一や或るものの概念規定と個の概念規定に異なりがあることが確認され、第二に、仮に個が超越概念であるとした場合でも個と有が置換可能ではないということが確認される。そして第三に、個という概念がカテゴリーの制約を受けないということに基づいて個が超越概念であることを主張する論が組み立てられ、最後に、神をモデルケースとして個性とはトマスにおいてどのような意味を持っているのかが改めて考え直される。以上のように、個体化という概念が多様に使用されていることをトマスによる超越概念論の側からも確認する作業を通じて、個という概念の理解が深められた。

1 批評

本論文は、事物の「個体化の原理」とは何かという問題に対して独創的な仮説をもって統一的理解を提示した野心作である。トマス・アクィナスにおける個体化の原理は、質料的事物については、指定質料、天使については、天使がもつ形相それ自体、神については、自存する存在それ自体、人間については、身体に関しては質料的事物と同様だが、魂に関しては自存するので天使と同様と理解するのが一般的である。これに対して、かつてオーエンスが統一的に「存在」を個体化の原理であるとする解釈を提示したが、本論文は、個体化の理拠（ratio）への着眼、および、「形相の非受容性の根拠」と「その基体」との区別を切り口として、遥かに精緻に個体化の原理の統一性を説明すると同時に、何故に上記のような多様化が見いだされざるをえないかの整合的理解も明らかにした。本論文は、単なる各論の集成ではなく、第二部も含めて各章の内容が無駄なく緊密に補強し合って統一的解釈を構成しており、論文の完成度から言っても、内容の内外に類を見ない独創性から言っても、高く評価されるべきものである。

ただし、あまりに緻密な論理構成は異論の余地をもたないわけではない。『「命題集」註解』第1巻における個体化の「原因（causa）」と「理拠」を共に「個体化の原理（principium）」の二側面と見なし、さらにこの二側面を『ボエティウス「三位一体について」註解』における「質料」と「次元」との区別、そして『「命題集」註解』第4巻における「個体化の第一の原理」と「個体化の二次的な原理」との区別と重ね合わせる解釈には、より一層のテキスト上の裏づけ、ないしは、トマス哲学全体の中での整合性の追求が必要かもしれない。

しかしながら、これらの論点は本論文の学術的価値を高めているものであることも疑いえない。今後、本論文は学会において大いに議論を呼び、著者自身の今後の研鑽も含めて、これまでとはレベルの違う個体論研究を内外にもたらすであろう。トマス・アクィナスにおける、あるいは、西洋哲学史における個体論研究の水準の引き上げに間違いなく大きな貢献を成し遂げたという意味において、本論文の学術的価値は異論の余地のないものである。

2 最終試験

平成 30 年 1 月 25 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条（1）に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。